

英彦山修験道における自然信仰と森林文化再考

― 鬼杉落枝と千本杉による不動明王像制作 ―

知足美加子

はじめに

山岳に伏し修行する山伏にとって、森林は重要な行場である。修験道には、自然信仰を基盤に神道や仏教など多元的な教義を包含する宗教観が存在する。英彦山修験道においても、自然は神仏として崇敬されていた。英彦山（標高一一九九m）は「水分神」とされ、水源を涵養する森林環境が護持されてきた。英彦山には修験道に関わりをもつスギ群が複数存在することから、樹木の中でもスギに対する信仰が厚かったことが窺える。

英彦山は、羽黒山、熊野大峰山とともに日本三大修験山のひとつとされる。江戸時代の最盛期には「彦山三千八百坊」といわれ、九州一円に約四二万戸の檀家を有した霊山であった。英彦山修験は、人畜草木森羅万象に神仏が宿るとして組織的に自然環境護持を行なった。英彦山修験道研究の第一人者である長野覚は、この点を「聖域・行場としての厳しい戒律や年中行事などを工夫しながら、その一方では講組織などによって登拝する多数の人々を迎え入れ、規制と開放の巧み

な組み合わせによる諸霊山独特の自然護持の形態」と説明している。³しかし明治期の神仏分離令（一八六八年）、修験宗廃止令（一八七二年）、廃仏毀釈によって文化財は破壊された。山伏たちは還俗・離散を余儀なくされ、口伝を旨とする修験道文化伝承はほぼ途絶えている。

英彦山修験道に関わる主なスギは以下の通りである。○南岳にある樹齢約千二百年の「鬼杉」（幹周十二・四m）（図1）。鬼杉は英彦山四十九窟のひとつ「大南不動窟（大南神社）」の近くにある。⁴○山頂近くの参道沿いにある山伏たちが整備したスギ群「千本杉」（図2）。○山麓の小石原地区のスギ群「行者杉（行者



（図1）「鬼杉」樹齢1200年
国指定史跡名称天然記念物



（図2）「英彦山千本杉」昭和初期絵葉書

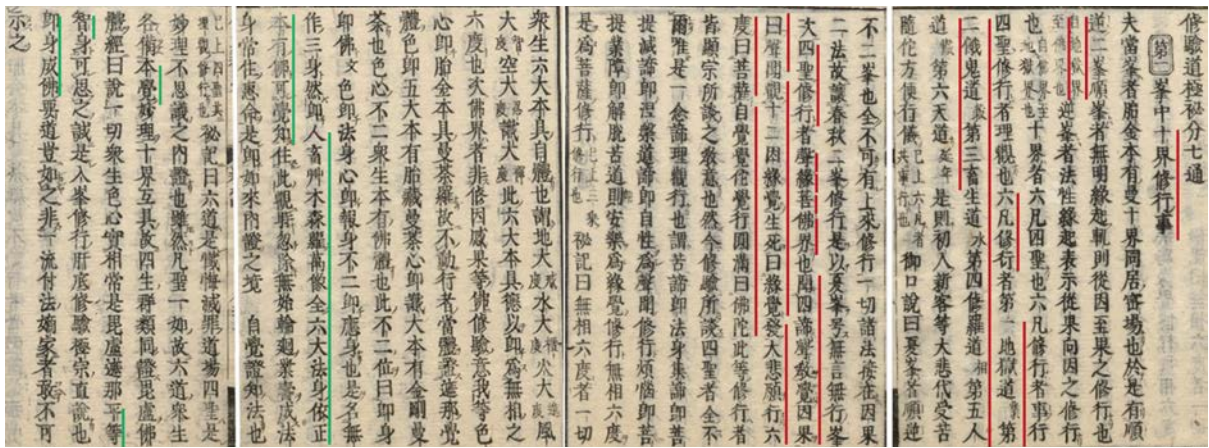
スギ遺伝資源希少個体群保護林」⁴。この区域には深仙宿（峰入りの行場）があり、英彦山に入山する修験者が杉を折って献木（挿し穂）したという故事がある。これらのスギ群は、自然と修験道文化の関係を伝えるリビングヘリテージという一面をもっている。

九州地域とスギの関係には、林学的には不可解な点がある。九州のスギは最終氷期最盛期（約二万五千～一万五千年前）以前に姿を消し、天然スギは存在しないとされてきた。林学者の宮島寛は花粉分析の結果、後氷期RⅢ a末期（約四五〇〇から一五〇〇年前）まで九州本島ではスギをみることはできなかったがRⅢ b期（約一五〇〇年前以降）以後、同時に九州各地でみられるようになったという。その理由として、宮島は挿し木（無性繁殖法）の可能性を指摘した。⁵ 歴史地理学者の松村安一は中世より九州でスギの挿し木（指杉）⁶ が行われていたと述べているが、その理由については明らかにしていない。本研究では、修験道におけるスギの信仰上の意義を明らかにし、英彦山修験道における自然信仰と森林文化を再考する。スギ霊木群について歴史地理学的な調査、芸術文化における表象の分析、遺伝的關係などの科学的調査を行ない、英彦山修験道と森林文化の関係を探る。第一章では、英彦山修験道における霊木思想や修行内容に着目し文献調査と踏査を行う。第二章では、英彦山における不動明王信仰とスギの關係について、修験道美術から分析を行う。第三章では、自然信仰と森林文化の関係を考察し、霊木信仰を具現化する芸術実践について述べる。

第一章 英彦山修験道における自然信仰と森林文化

一 霊木化現仏

古代からの自然信仰において、神霊の依代としての巨岩や窟、滝、巨木は尊いものとされてきた。その中で草木の生命力、特に永い生命を保っている巨木への畏敬の念は「霊木思想」となっていた。『日本書記』の六一八年の条に、落雷を受けた木の霊性を慮り「霹靂（落雷）の木なり。刈るべからず」と言つて木の伐採を咎める場面がある。落雷は天地感応の結果であり、それを受けた樹は選ばれた依代として尊いものとされた。⁷ また、五九五年の条には仏教伝来の頃、漂着した香木・白檀で仏像を造立したことが記されている。白檀で制作された仏像を檀像という。白檀を産出しない日本における檀像制作は、樟などの香木で代用されることがあった（飛鳥仏など）。檀像は、材質そのものを尊重し、素地を活かした「素木像」であった。神の依代である霊木は、同時に仏教尊像の代としての「霊木化現仏」となっていた。特に仏教黎明期においては、霊木性を強調するために、「一木造り」や、鑿跡を残す「鉿彫り」、生の立木を彫る「立木仏」などの手法がとられた。櫟野寺の本尊は、仙人達が信仰していた櫟の木に霊夢を感じた最澄（七六六～八二二年）が、立木のまま彫つたと伝えられている。「霊性を帯びた古木に宿る形なき神が、仏として顕現し、時を経て朽ちていく」という霊木化現仏は、「神霊の依代」であると同時に「発心から涅槃にいたる仏教観」を兼備えていた。この視点からみれば、神宿る



(図3)「阿吸坊即伝『修験道修要秘決』1558年(寛政十年本) 出典：信州大学附属図書館蔵書＊棒線筆者

霊木によって彫られた仏像は、神道と仏教の概念を習合し具現化したものと考えられる。

二 英彦山修験道とスギの関係

室町時代、英彦山修験道に学んだ阿吸房即伝は『修験道極秘分七通』(図3)を記している。阿吸房即伝は下野国日光山から豊前国彦山に赴き修行を積み、永正六年(二五〇九)に彦山正大先達となった。即伝は、晩年彦山華蔵院で過ごすまでの約五十年の間に、彦山派修験章疏を体系化した学僧である。彼は全国の修験道場をまわり、教えを乞う者に印信(秘法伝授の証となる文書)を示した。即伝の思想には英彦山修験における自然観や平等性尊重の姿勢が見受けられる。『修験道極秘分七通』には、「人畜草木森羅万象全シ六大法身ノ依正本有ノ佛ト覚知スベシ」と記されている。現代語訳すると「人

間、動物、草、木、森羅万象の全ては六大の真理を宿す正報と依報である。(その全てが)本来的に仏であると知り知るべきである」となる。¹¹さらにこの文章には「本覚」(全て平等に仏性が宿するという思想)、「平等智」(差別なく平等であるという智慧)、「即身成仏」(この身このままで仏となる)という言葉が記載されている。英彦山今熊野窟嘉禎三年磨崖仏(一二三七年)の銘文にも「平等利益」という言葉が刻まれている。法華経につながる平等性を重んじる姿勢が、英彦山修験に深く根付いていたことが窺える。¹²自然界の全てがそのまま真実であり、平等に仏となるという考え方を「一切衆生悉皆仏性」、山川草木悉皆成仏」という偈で表すこともある。植物が芽吹き、花が実となり枯れ果てる現象を、仏教の「発心・修行・菩提・涅槃」とみなし、すべてが成仏するというものである。自然現象の動的なあり方に仏教的な悟りを重ねる発想は、修行者たちによる自然観察の中で醸成されたのであろう。

英彦山修験者の修行のひとつである十界修行は「峰入り(春峰は宝満山、秋峰は福智山まで約50kmを往復する)」と呼ばれていた。修行者は、峰入りを「仮の死を経て地獄界で苦行し、母の胎内としての英彦山(佛界)において新たな命を授かり、仏として出生する過程」と捉えていた。前述した『修験道極秘分七通』では、十界修行を「六凡・地獄界」と「四聖・佛界」にわけ、「地獄界」は、1地獄道・業秤(図4)、2餓鬼道・穀断、3畜生道・水断(明治六年の英彦山資料では角突)、4修羅道・相撲、5人間道・懺悔、6天上道・延年となる。「佛界」は、



(図4)「業秤」出典：修験春風会『天上への道 - 復活英彦山入峰修行』鉱脈社 2004 年 p.62

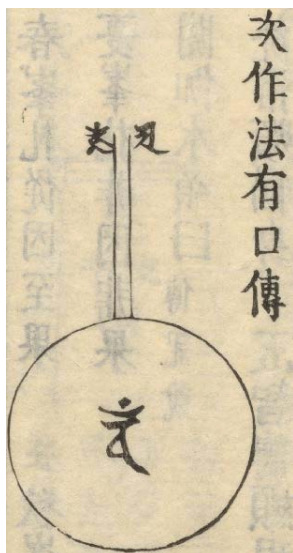


(図5)《六道・十王図第三幅(部分)》室町時代 出典：『祈りのかたち』出光美術館蔵 2017 年 p.71

7 声聞^{しやうもん}四諦(苦諦、集諦、滅諦、道諦)の声の教えを聞き因果を覚る。
8 縁^{えん}覚^{かく}十二因縁を観て生死を覚る。9 菩薩^{ぼさつ}大悲願を発して六度(布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧)を行う。10 佛陀^{ぶつ}自覚、覚他、覚行円満、と記述されている。十界修行のうち「六凡」は、六道(輪廻転生する地獄世界)をあらわす。室町時代の六道十王図には罪の重さを測る「業秤」が描かれており、地獄道修行はこの地獄図のイメージを意識していたと推察される(図5)。峰入りには複数の「宿」があり、霊威の目印となる「場」や「境」が選ばれることが多い。春峰における深仙宿では、六凡―四聖、金剛界―胎藏界の境として重要な儀式(正灌頂^{しょうかんじやう})が行われた。この行に関連して、深仙宿より英彦山に向かう小石原地区に、杉の穂を山に直接さす献木植栽(挿し穂)が行われたとされる。これらは現在、樹齢二六〇〇年、約四・六八haにわたる三七五本のスギの巨木群「行者杉」となっている。スギは樹齢が長く、魂が宿るとされた。長野県は、英彦山山伏がスギを重視した理由について、「永久不変の象徴、霊の依代」「杉葉による宿の浄化」^{すぎあえ}「杉饗

(杉板にのせた供物)」「小木(護摩木)」「商品価値(屋根材の杉皮・線香用材の生葉)」という点をあげている。¹⁵⁾

即伝の修要秘決に、深仙宿で行われた「峯中正頂柱源供養法大事」の説明がある。この儀式は、修験者が壇具に六大を象徴させ(壇・地、柱源・水、源蓋^{げんがい}・火、酒水^{しゅすい}・風、華鬘^{けまん}・空、乳木^{ちぎ}・識)、「正報(身体)」と「依報(環境)」を結ぶ「柱」になることを志向するものである。説明図(図6)には円の中心に梵字「カン(不動明王)」がおかれており、不動明王が中心的存在であることが示されている。不動明王の重要性は『彦山縁起』の「役君^{えのきみ}は不動明王の応化^{おうげ}なり(修験道開祖の役小角は不動明王が姿を変えて現れたもの)」という記述にも表れている。十界修行では、先まわりした度衆^{どしゆ}によって要所に不動明王像を設置する「涌出^{ゆうしゅつ}(大地からの不動明王出現)」という修験者の振る舞いがあった。この涌出は、臨時的な設置によって「無から有を生じる過程」を暗示し、「大地からの湧水」や「樹木が成長する様」を表現していると推測される。柱源供養の説明図にある二本の直線の先には、物事の始めを表す「ア(阿)」と最後を表す「ウン(吽)」の梵字が配されている。垂直方向の直線的な動きは、正灌頂(頭上に水を注ぐ儀式)における水の動きを表すと



(図6)阿吸坊即伝『修験道修要秘決(中)』1558年(寛政10年本) 出典：信州大学附属図書館蔵書

考えられる。興味深いのは、下降と上昇を暗示する動きから、樹木に
関する水の動きを連想させる点である。不動明王は十九観¹⁶によると
「天地和眼^{てんちわがん}」をもち、修験者にとって天地和合を象徴する存在である。
また、修要秘決の「不動十界之事」には、山伏は「十界を本来有する
不動明王の直體^{ちよくたい}」だと説かれている。本物の山伏かどうかを試す「山
伏問答¹⁷」という行では、「修験道の本尊とは」という問いに対して「大
日如来の教令輪身大忿怒形の不動明王にて候」と答えることを求めら
れる。無明を打破し、他者救済の強靱な意志をもち行動する不動明王に、
修験者は厳しい山岳環境で修行する自分たちを重ね、不動明王と団体
となることを理想としたのであろう。この図は、不動明王と団体となっ
た行者の身体と意識、環境の多様な要素が調和する姿だと見受けられ
る。特に深仙宿にスギが必要だったのは、「天地を水によって結び、火
や風に転じて役立ち、堅く動かないスギの姿」に、修験者が不動明王
を観想したからだと筆者は考える。

三 鬼杉と千本杉の伝承

英彦山南岳の「鬼杉」は大正十三年に国指定史跡名勝天然記念物に
指定され、林野庁の「森の巨人たち百選」にも選ばれている。春峰に
おいて南岳から英彦山に入る際、行者たちは鬼杉に迎えられる。鬼杉
の由来は南岳の「材木石」（安山岩の柱状節理）の伝承に付随し、英彦
山権現に追い払われる鬼が植樹したとされている。民話では「鬼が逃
げる際に、大地に挿したスギの杖が鬼杉になった」、または「鬼が建て
た社の柱の一本が後に芽を拭き、鬼杉になった」とするものがある。¹⁸

どちらも材木石から南岳参道沿いにかけての人為的な植樹を示唆して
いる。鬼杉は「牛窟」という石窟の手前に立っている。英彦山では
弥勒信仰の兜率天四十九院になぞらえ、四十九箇所の石窟などを霊場
として尊んできた（英彦山四十九窟）。『彦山流記』によると、牛窟は
大威徳明王^{だいいたく}（図7）が守護している。大威徳明王は西方の守護者で、
六足尊六面六臂、阿弥陀如来の化身であり、ヒンドゥー教の死の神ヤ
マ（閻魔天^{えんま}）を表す青い水牛に乗る。牛窟の「牛」は、この大威徳明
王の鳥獣座ヤマを連想させる。筆者は鬼杉の現状を知るために、ドロ
ン（無人航空機）で空中撮影を行った。鬼杉は、屋久島の縄文杉と違
い先端まで真っ直ぐ伸び、樹幹には人為的に枝打ちされた跡が複数存
在していた。戦前には60mあったが、落雷によって現在は三八mと
なっている。空撮により、大南不動窟から鬼杉が視認できることがわ
かった（図8）。牛窟を守護する大威徳明王が不動明王を中心にした
五大明王のひとつであることを鑑みると、鬼杉は大南不動窟の不動明
王との関係の中で護持されてきた可能性が高い。大南不動窟は彦山金
胎思想における胎蔵界の中心だった（金剛界は北岳の豊前窟）。大南の
不動明王は衆生の心
臓であり、衆生の心
に起こる三毒煩惱を
不動明王が代わって
苦しみ、焼き尽くし
ている様をあらわす



（図7）《大威徳明王（仁王經
曼荼羅部分）》江戸時代
（英彦山神宮提供）



(図8)「鬼杉と大南神社 (ドローン撮影画像)」2022年

という。¹⁹ 本尊である銅製鑄造《不動明王坐像》(鎌倉時代、図9)は、福岡県指定文化財である(英彦山修験道館収蔵)。仏像でありながら神像のように細身に抽象化され、「神仏習合」を象徴する見事な造形である。

次に英彦山八合目付近にある千本杉にまつわる伝承を紹介する。『彦山見聞記』(一七一七年)には千本杉について「昔秦の徐福、肥前の国よりこの山に登り、高天原の野中に長生不死の薬を埋め、そのしるしに著^{めじき}

を植えたりし由記せり。この薬を掘り得て服しける人長生の寿を保ち、仙人となり、覚仙と名付く、中宮岳の奥を千本杉といふも、この所に栖止せし故覚仙杉ともいへる由、この事は彦山旧記にもいささか見えたり²⁰」という記述がある。秦の徐福とは、紀元前二一〇年頃不老不死の薬を求めて中国から訪れたという伝説の人物である。徐福が薬を埋めた印として植えたという著(ノコギリソウ・易に使う)は、標高千m以上の高地に生息する多年草である。仙人が常住すると想像させるようなスギ林がかなり古い時代から存在したことが窺える。在来種のスギにはホンスギ、綾杉、メアサ杉などがあるが、千本杉は寒冷地で緩徐に成長するホンスギを主としている。²¹ 千本杉は、修験者に

よって参道の両脇に植林された樹齢約三〇〇、四五〇年のスギ群、および下層にシロモジ、クロモジ、カエデ、シキミ、ガクウ

ツギ、ヌルデなどの落葉広葉樹がある針広混交林であった。²²

千本杉の上部には産霊神社(行者堂)がある。「文武天皇の時代(大宝年間七〇一〜七〇三年)高皇産霊尊が鎮座した旧地である」という神託があり、天平十二年(七四〇)に聖武天皇の頼願によって建立されたという。高皇産霊尊(別名、高木神)の「ムス」は植物の生成繁殖する力を表すところから、元来は「植物の生成力を神格化したもの」である。別名の高木神は文字通り「高い木」を意味し、雷(建御雷神)を使役する神とされていた。巨木は天地感応の落雷を招き、雷は穀物生育を促すことから、雷と植物の力が関連づけられたのであろう。産霊神社の高皇産霊尊や覚仙杉の逸話から、約一三〇〇年前にはすでに英彦山上部に樹高の高いスギ林があった可能性がある。

四 自然護持のための仕組み

山の木々が水を生むという事実は農耕民の信仰を集める由縁となり、英彦山は水を分け与える「水分神」^{みくまりのかみ}と呼ばれていた。この水を中心と



(図9)「《不動明王坐像》鎌倉時代 鑄造 総高41.6cm (英彦山神宮提供)

した自然環境を守ることに貢献した英彦山修験道の禁忌に「四土結界」がある。山伏たちは高度によつて四つの結界をおき、その境界には「木の鳥居（産霊神社）」「石の鳥居（奉幣殿）」「銅の鳥居（表参道石段入口）」を設けた。山頂域は「常寂光土」とよばれ、ブナ原生林と熊笹が繁茂していた。この結界には十五回の峰入りを経験した山伏しか立ち入ることができず、水質汚染につながる行為は禁じられていた。木の鳥居より奉幣殿までの「実報莊嚴土」には千本杉がひろがり、人の住む家を建ててはならないという忌避があつた。これは自然保護だけでなく、人災防止の観点からも理にかなつていた。次の結界を「方便浄土」といい、殺生などの血不浄を忌避した。山伏たちは「坊」という住居に茶・竹・柿・アカマツ・ケヤキなどの生活用材や火災延焼防止に役立つものを植樹している。銅の鳥居より下を「凡聖同居土」といい一般人も住むことができたが、土壌を改変する五穀栽培は禁じられていた。

英彦山修験道において森林環境護持は組織的に行われており、江戸期には「山奉行」という部署が設けられていた。また条例として、山外への竹木持出を禁ずる「九州彦山條々」（一六〇〇年）などが存在した。このような法整備は、戦国時代の争乱による森林環境破壊が引き金となつてゐる。豊臣秀吉が九州を平定した天正十五年（一五八七）、安芸国の小早川隆景は筑前三一万石の領主となつた。その二年後、隆景は彦山七力村二千石余を天下の御祈禱料として寄進している。この史実に基づく逸話の中に、英彦山における霊木信仰が窺える部分がある。知雄義谿『彦山権現靈驗記』（一七〇九年）には次のように記されている。

筑前太守世々崇_ニ権現_一、當置_ニ莊田若干畝_一以充廟費、泊_ニテ小早川隆景爲_ニ太守_一盡奪焉、景造_ニテ巨舶_一偶々闕_ニ一橋_一、適々登_ニ本山_一、見_ニ一大杉一伐_レ之爲_レ橋、筮_ニ吉_一飲_ニ千船上_一、天氣廓清風波不_レ興、少焉、橋忽毀_レ船、後景遠獵_ニ千野_一、半途回_ニ顧_一城中爲_レ海樓臺觀樹類_ニ然乎波瀾浩渺之中_一、令_ニ從者_一視_ニ亦無_ニ以異_一、一、景大慍慍便歸、漸近望_ニ城_一依然如_レ舊、又景家臣有_ニ市正者_一云、一時晝晦風雨、忽有_ニ三火輪旋轉而來直落_ニ正家_一、正心_ニ謂_一、妖獸所_レ爲、抽_ニ劍伐_レ之應_ニ時悶絕_一、久之醒悟無_レ所須見、正知_ニ神之爲_一、一、念言、儼現_レ之令_ニ知_ニ神所_一在、言未_レ卒_ニ火輪須_レ現飛入_ニ本山三獄_一、正驚異懺謝、次日語_ニ隆景_一、景恍悟_ニ船橋忽折城中爲_ニ海皆神之爲_一、汗流大悔、遂歸_ニ莊田於神_一奏

筑前を治める太守は代々権現を崇敬し、莊園の田に畝を置き靈廟を満たすことに費やしてきた。ところが小早川隆景が太守となると尽く奪つた。隆景は巨大な船を作つたが、帆柱が足らなかつた。そこで英彦山に登り大きな杉を帆柱のために伐採した。船上で吉凶を占つたところ、天気よく風も清らかで波はなかつたのに、しばらくして帆柱が急に船を壊し、後景は遠くひき、途中で返すと城中の物見やぐらがその高潮の中に崩れた。從者をもつて視させても同じ光景がみえた。隆景はおおいに戦慄しただちに歸路についた。漸近してみると城は以前のままであつた。家臣の市正がいうには、一瞬にして風雨となり、たちまち三つの火の輪が旋回して落ちてきたという。考えるにこれは妖怪の仕業であらうと、劍をぬいてこれを討伐しようとするが悶絶してしまう。しばらくして目覚めるとそこには何も見えない。これはまさに神のなせることだと気づいた。

もし本当に神の仕業ならば再び現れてどこの神なのか教えてくださいと念じたところ、その言葉が終わる前に火の輪がまた現れ、英彦山の三つの岳に飛んでいったので大変驚き深く反省した。翌日このことを隆景に語った。隆景は帆柱が折れ海となったことの意味を悟り、汗を流して大いに悔やんだ。そしてついに莊園の田を神に返し奉った。(現代語訳筆者)²³

小早川隆景は、朝鮮出兵の船の帆柱のために英彦山の大杉を切ったという。隆景が進水式で船の吉凶を占ったところ、帆柱が船を壊し津波が隆景の城を飲み込み、英彦山の三所権現が三つの火輪となって彼らに迫る光景がみえたという。この靈驗記の作者は隆景の三原城が瀬戸内海の浮城だと知っており、津波が一度ひいてから押し寄せるくだりに現実味をもたせている。この話は、英彦山の杉を伐採することをいさめる「教訓」となっている。一方、靈驗記から八年後、香川正矩『陰徳太平記』(二七一七年)に、隆景側からみた同様の話がある。船のために英彦山の木を伐採した隆景を、彦山天狗がとがめる部分を抜粋すると次の通りとなる。

當山樹木於、開基已來千百年霜雪閱、共、竟枝葉條幹、勿、敗勿、拜、是神佛敬崇、所、致也、況隆景、何、恐心、是剪伐、舟具用、事、奇怪、御邊仁義大道如、形行、佛神歸依心深、未、法有難名將、聞、カ、々惡逆無道舉動、

英彦山の樹木は開基このかた千百年の年月を経るといえども、葉や枝、幹にい

たるまで折るなかれ、抜くなかれといわれてきた。これは神仏を崇敬するがゆえである。それなのに隆景、何の恐れる心もなく樹木を伐採し、舟具に用いるとはなんと奇怪なことか。そなたは仁義の大道を体現し神仏への帰依の心も深い。この末法の世には有り難き名將だと聞いていたのに、このような惡逆無道の挙動をするとは。(現代語訳筆者)²⁴

ここで重要なことは、英彦山山伏の象徴としての天狗が「神仏を崇敬する心から英彦山では樹木をきらなかつた」と主張し、「木を伐採することを、惡逆無道の挙動」とする点である。ここに英彦山における樹木への信仰が表象されている。この場面を月岡芳年が明治二四年(一八九一)に「小早川隆景彦山ノ天狗問答之図」(図10)として描き、『新形三十六怪撰』に掲載している。英彦山天狗が大きく描かれ、スギ林の手前に天狗、木々の合間から船(帆)や隆景、従者がみえるとい



(図10) 月岡芳年《小早川隆景彦山ノ天狗問答之図》1891年 出典：江戸歴史ライブラリー『新形三十六怪撰』BCCKS 2018年

う構図になっている。隆景たちが慌てている姿が小さく描かれていることから、月岡は英彦山霊驗記の内容を知っていたと考えられる。

次に組織としての自然護持の取り組みをみてみよう。英彦山の文化と環境にとって最も大きな痛手のひとつは、大友宗麟^{そうりん}の息子・義統^{よむね}による一五八一年の大規模な英彦山焼き討ちだった。これを機に山伏たちは、自治組織として神社仏閣をつくる「作事奉行」、森林環境を整備する「山奉行」を設立する。見方を変えれば、人為的惨事が英彦山の環境護持の組織整備をうながしたともいえる。小早川隆景が彦山領を返したのに対して、小倉藩主毛利壱岐守勝信は課役をかけるなど英彦山との確執が絶えなかった。そこで英彦山は一五九九年に公儀へ訴訟し、一六〇〇年に「守護不入」などを認める裁決を勝ちとる。²⁵この「九州彦山條々（彦山法度）」は、徳川家康の裁許を得た法令として公認された。この中の「山中之竹木、他方より不可伐採事」という条をもつて、英彦山は森林資源を護る姿勢を公にしたことになる。この彦山法度によつてその後の寺院統制（寺院法度）を免れたことが、江戸時代の英彦山の繁栄を支えた。²⁶その後、英彦山座主^{ざす}（修験者最高位）より「決められた範囲以外で薪柴をとること。屋敷内であっても用材となる木を断りなく採つてはならない」（一六四二年）など、樹木管理に関する複数の法度が定められている。

「山奉行」の仕事として、造林の実施や伐採、年二回の杉指、根攫^{ねざらえ}は幕末まで実施されていた。個人持の山林の譲渡については、証文に山奉行の奥印を得なくてはならなかった。²⁷一六七一年の豊前坊の火事

のため山奉行が杉千本を指したと記録がある。²⁸一六八六年の山内法度の付記には「杉や松を勝手に伐採した場合は料金が課されるが（当年に）火事が起こったため山奉行が見逃した」とあり、山奉行が森林管理をしている様子が見受けられる。また、森林環境を「景観」という観点から捉え整備した英彦山座主・相有^{そうゆう}の功績は大きい。相有は一六九三年に「梅桜楓などを庭や門前に植え付けること」や「杉植、下擢^{したさげ}の時期と杉指場の範囲」などを定めた。政所坊・組頭・山奉行が中心となり、毎年一人につき百本は植付けることとなっている。また、英彦山における杉に対する崇敬を表すものとして、泉蔵坊杉（樹齢八百年）の逸話がある。一六九六年に聖護院と本末訴訟がおり、その経費のため靈仙寺^{りょうぜんじ}（現英彦山神宮）境内の巨杉が切られることになった。しかし山伏の泉蔵坊が私財を投じて守ったことから、この杉は泉蔵坊杉と名づけられる（平成三年台風で倒壊）。この裁判によつて英彦山は別格本山と認められ、英彦山ではより秀麗な環境づくりへの意識が高まる。その後、相有は一六九八年に「路の両脇に杉を植林し景観を整える」と決め、樹木の景観によつて靈威や美しさを高めることを志向していく。また同年に「惣物銀」という保険としての共有基金の制度を発足させており、火災や自然災害などからの復興を組織として行っている。実際に杉指が行われたことは石碑などにも刻まれている。玉泉坊の石碑「杉二万五千本指立」文化十年（一八二七）、守静坊普覚の墓碑「杉五万本指立」天保三年（一八三二）、守静坊普覚の墓碑「杉一万本指立」天保十年（一八三九）などの記録から、かなりの

数のスギを挿し木していたことがわかる(図11)。英彦山の杉群が遺伝的に独自性をもつ(他所から持ち込まれたものではない)可能性、および人為的に維持管理されていたことがDNA分析



(図11) 玉泉坊「杉二万五千本指立」1827年(撮影:植田周平)

を行なった渡辺敦史の研究グループによつて科学的に示されている。³⁰ 渡辺らの調査結果によると「英彦山神宮スギ群」「千本杉」「鬼杉」「行者杉」はそれぞれ遺伝的に独自性があること、江戸期に霊木群の挿し木が行われていたことが明らかになっている。南岳と、中岳の霊木群は遺伝的に若干の違いがあり、「行者杉」の $\frac{1}{3}$ は山外在来品種に近く、「行者杉」の一部は献木の可能性がある。

第二章 仁王経曼荼羅の表象

英彦山修験道における自然信仰は、仁王経曼荼羅の表象の中にも現れている。仁王経曼荼羅は、鎮護国家など「現世利益」を願う密教修法「仁王経法」の際に用いられる。文献³¹によると英彦山における仁王経講は文安二年(一四四五)一月十八日に下宮(下津宮)で行われたのを初出とする。仁王経とは『仁王護国般若波羅蜜多經』という仏教經典のことで、鳩摩羅什(天台系)と不空(真言系)が漢訳している。英彦山には美しく精緻な《仁王経曼荼羅》(江戸時代)(図12)が存在

する。この曼荼羅を所蔵していた宗賢坊は、『鎮西彦山縁起』³²(一五七二年)を執筆した由緒ある坊である。仁王経曼荼羅は、上位(最上部に配し重要視される方位)に北か東を守護する神仏像を配置するものが殆どであり、無病息災を祈る「息災法」の際は上位を北方にし、利益を願う「増益法」の際は上位を東方にする。これらは不動護摩法という不動明王を本尊とする護摩行における方位に準じたもので、怨敵退散や呪いなどの「調伏法」(南上位)や、敬愛を願う「敬愛法」(西上位)の曼荼羅はほとんど存在しないとされてきた。しかしながら、英彦山本は上位が西方になっている。また、描かれている全二五尊のうち八尊が、「木の丸太を仏座にする」という珍しい曼荼羅である。なぜ英彦山本は西方が上位となり、木が仏座となったのだろうか。筆者はこの二点に、英彦山独自の価値観が表現されているのではないかと考えた。英彦山の《仁王経曼荼羅》は、三層(三院)に分かれる構成になっている。第一院に不動明王(大日大聖不動明王)を中央として東方に降三世明王、南方に軍荼利明王、西方に大威徳明王、北方に金剛夜叉明王を配置した五大明王を配する。第二院は不動明王の眷属である八大童子、第三院に十二天が配されている。八大童子と十二天が同幅に描かれることは、『仁王経曼荼羅』としては類をみない。

英彦山本の八大童子の上位は、中央に龍王にのった阿耨達童子、その横に白い矜羯羅童子と清浄比丘童子が坐す。中位は指徳童子と恵喜童子が三叉戟をもつて坐す。下位の中央に恵光童子、その横に制叱迦童子と鳥俱婆識童子が坐し、三尊とも憤怒相である。鳥獣座(仏座)に



(図12) 《仁王經曼荼羅》江戸時代 山伏文化財室収蔵 絹本著色
(英彦山神宮提供) * 尊名筆者加筆

注目すると、矜羯羅童子、制陀迦童子、恵光童子、恵喜童子は、小花が咲く「木」の切り株の上に坐している(図13)。童子の光背も丸太の切り口のようなのである。上位中央の阿耨達童子の「龍王」の鳥獣座が他より大きく描かれており、「水」への崇敬が見受けられる(図14)。龍王を上位中央に配し、仏座を木に恣意的に変更することで、英彦山の「水と木への信仰」を表現しているのだろう。西を上位とする八大童子の配置については、『修験秘行法符咒集』にある「不動八大童子梵書」(図15)と一致している。英彦山の仁王經曼荼羅は、鎮護国家といった密教修法よりも、修験的な不動明王の世界観を表現している曼荼羅だと

考えられる。

次に、第三院

に配置された

十二天をみてみ

よう。十二天と

はインドの古代

神話の自然神な

どで、十方位に

割り当てられた

天部に、星宿と

宇宙の運行を象

徴する日天・月

天を加えた守護

神である。仁王經曼荼羅に描かれた十二天を『曼荼羅図典』³³を参考に、

八大童子と十二天の尊名を、英彦山本に記したものが(図12)である。

十二天の守護方位によると、「日天」や宇宙を表す「梵天」が下位に配

置され、西方上位の「水天」や「月天」、大地を表す「地天」の重要性

が強調されている。月は、ヒンドゥー教で不老不死の薬草の霊葉ソ-

マの盃である。「地天」は、十二天の中で唯一木の仏座に座し、植物な

どの生命を育む役割が強調されている。水天、地天、月天は「命を育

む象徴」というイメージを共有している。英彦山の《仁王經曼荼羅》は、

前述した「不動八大童子梵書」の西方上位を重んじつつ、さらに水、月、



(図14) 《水天と阿耨達童子
(仁王經曼荼羅部分)》江戸時代



(図13) 《地天と矜羯羅童子
(仁王經曼荼羅部分)》江戸時代



(図 15)「不動八大童子梵書」
出典：日本大蔵經編纂会『修
驗秘行法符咒集』八幡書店
2010 年 p.181

大地といった「植物生命の滋養」を重要視するという内容を伝えている。不動明王眷属の八大童子を配置することで、不動明王の莊嚴を高めていること。また、八大童子と十二天を組み合わせ、西方上位の配置にしたということに、英彦山修験道の文化観が窺える。不動護摩法において西方を修するのは敬愛法である。英彦山の《仁王経曼荼羅》は、自然界からの愛を獲得するもの、つまり「五穀豊穡」を重視する曼荼羅なのではないか、というのが筆者の分析である。

第三章 鬼杉不動の制作

英彦山修験道における森林文化のあり方や自然護持の仕組みについての考察をふまえ、本章では芸術実践として《鬼杉不動》を制作した過程について述べる。英彦山修験道の伝統は、明治期の廃仏毀釈によりはほぼ途絶えている。約一五〇年の間、英彦山神宮内で護摩供は行われなかったが、奉幣殿再建四百年記念事業（二〇一六年）を機に復活している。英彦山神宮は修験道再興の一環として、下津宮での護摩行のため新たな不動明王像安置を発願し、制作を筆者に依頼した。筆

者は英彦山修験道の自然信仰に則り、英彦山のスギ霊木群（鬼杉落枝、千本杉倒木）を用いて制作することにした³⁴。寒冷で厳しい環境に耐え少しずつ成長した鬼杉は、杉とは思えないほど硬い材質であった。また風雨に耐える中で生じた深い目割れ）があり、杢目と木の成長方向を確認しながら形を出していった。不動明王の目は天地和眼といい、右目が上、左目が下を向き、天地の和合を表現している。偶然だが右目の瞳や条帛、腕の形状にそって鬼杉の杢目が現れ、彫る前からその形になることが決まっていたかのような感覚を覚えた（図 16、17）。

火焰光背は、英彦山神宮の許可のもと、山中で製材した千本木倒木を用いている。平成三年の台風で倒木したものである。縦引きしたところ、雉の羽模様のような複雑で美しい杢目が現れた。この鬼杉や千本杉に共通する独特な杢目は、風雨が強く寒冷な英彦山の環境が生み出したものである。不動明王の火焰光背は「迦楼羅焰」とよばれる。迦楼羅（サンスクリット語ではガルダ）は太陽を象徴し、智慧の炎で悪毒竜を食す。仏教では金翅鳥ともいわれ、八大童子の阿耨達童子の頭上を莊嚴している。迦楼羅という火の鳥が両羽を広げる姿をイメージし、杢目の流れにそって焰を造形している。不動明王の右手にある剣は、龍が巻きつく俱利伽羅剣とも呼ばれる。剣には二つの意味があり、第一は中道の意味を明らかにする智慧の剣である。有無の両極端を否定し、あらゆる現象は不生不滅であることを悟らせる。第二は降魔の剣である。左手の絹索は、剣で煩惱と業を断ち切り、絹索で引つ張って菩提まで連れていく。剣を動、絹索を静として、両手の持物をあわせて動

即不動とする。不動明王の仏座である瑟瑟座^{しつしつざ}については、行者が不動明王と一体となるための観想法として「定印を結び、目を閉じて運心瞑想す。壇上に吽字あり。字、変じて瑟瑟座と成る」と淳祐『不動尊道場観』の中に記されている。しかし、瑟瑟と音写されるサンスクリット語は存在せず、意味から考えた場合、盤石、宝石を意味する「シラー」という言葉が近いという。経典（法華経功德品）ではシラーは「碧玉^{へきぎよく}（翡翠^{ひすい}）」と訳されている。瑟瑟座は井桁に組まれた角材を象徴した「七段重ね」で、中央の段が細く絞られたような形とし、碧玉に近い彩色を施した。七段ある瑟瑟座の一段目は、山中で製材した千本杉倒木、二段目より下は英彦山神宮横のスギである。この不動明王像は、修験道文化の中で重視され、かつ遺伝子的に独自性をもつ可能性が高い「鬼杉」「千本杉」「英彦山神宮スギ」によって構成されており、英彦山スギ霊木群への崇敬を集約したものとなっている。二〇二二年、本像は英彦山神宮下津宮に奉納され、『鬼杉不動』と名付けられた。高千穂有昭禰宜が本像に対して護摩供を続けており、英彦山修験道復活の兆し



(図 16) 知足美加子
《鬼杉不動》2022 年

を宣するものとなっている。

おわりに

本論では、英彦山修験道における自然信仰と森林文化について考察を行った。第一章で



(図 17) 《鬼杉不動部分》
2022 年

は、英彦山修験道におけるスギ霊木群の文化的意義に着目した。山伏たちは「人畜草木森羅万象全六大法身依正本有の佛」として、自然の全て（有機的なつながりや現象にいたるまで）に神仏を感得しその関係性の中で生かされ悟りに至ることを重視した。十界修行の柱源供養の分析から「天地を水によって結び、火や風に転じて役立ち、堅く動かないスギの姿」に修験者が不動明王を観想したという可能性を示した。また、英彦山の自然護持の組織的な取り組みが戦国時代の災禍を契機にしたものであることに着目し、『彦山権現靈驗記』や『陰徳太平記』、山奉行が杉指を行った記録等から、英彦山におけるスギを中心とした霊木信仰を明らかにした。第二章では『仁王経曼荼羅』の表象を中心に論じた。英彦山本が西方を上位したのは、修験における八大童子の方位的配置を優先し、かつ植物生命を滋養する水や大地を尊重する意図があると筆者は分析した。その理由として、複数の尊容が「木の切り株の仏座に座していること。次に上位中央の阿耨達童子の鳥獣座の「龍王」が大きく描かれ「水」への崇敬が強調されていること。最後に十二天の「水天」と「地天」を上位に配し植物育成の象徴が尊

重されている点を取り上げた。英彦山の《仁王経曼荼羅》は自然界への崇敬を示し、「五穀豊穰」を願う曼荼羅だったと推測される。第三章では、自然信仰と森林文化の考察をもとに、霊木信仰を具現化する《鬼杉不動》の制作について述べた。

本論は英彦山修験道の自然信仰のあり方に光をあて、自然共生社会の意識づくりにつながる修験道の普遍的価値を再評価するものである。今後も「環境」と修験道文化の関係について考察を深めていきたい。

1 添田町役場のレーザー測量調査の結果、六四五面以上の坊屋敷や堂社地などの平坦地が確認された。（『国指定史跡英彦山保存活用計画』添田町まちづくり課 二〇一九年 三六頁）

2 長野覚『英彦山修験道の歴史地理学的研究』名誉出版一九八七年 三〇八～三二九頁

3 長野覚「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持（その一）」『駒澤地理』一九八九年 五一頁

4 『彦山流記』一二二三年（添田町役場『彦山流記、附・彦山縁起』葦書房一九九三年 五一～五二頁）

5 宮島寛『九州のスギとヒノキ』九州大学出版会一九八九年 二三～二八頁

6 さしスギは差杉、指杉とも書き、山地直さしで、これがさし木の原初形態である。（松村安一「スギさし木林業に関する歴史地理学的考察―スギのさし木林業の研究第三報―」一九六六年 二二頁）

7 田邊三郎助編『神仏習合と修験』新潮社一九八九年 七一頁

8 英彦山は古来「日子山」と呼ばれていたが、八一九年に嵯峨天皇の詔によって「彦山」に改められ、一七二九年に霊元法皇の院宣により「英彦山」と改称されている。

9 阿吸房即伝は永禄元年（一五五八）に「彦山峯中灌頂密蔵」を撰した。（川添昭二、廣渡正利『彦山編年資料古代中世編』文献出版一九八六年 一九九～二〇五頁）

10 「六大」とは地水火風空識。「依正」とは依報と正報のこと。過去の業の報いとしての心身を正報といい、そのよりどころとなる環境を依報という。

11 宮家準『修験道聖典』春秋社 二〇二二年 一二三～一二五頁参考

12 拙稿「3Dデータ化による修験道美術の再現―英彦山今熊野窟を中心に―」日本

山岳修験学会 二〇一四年 七六〜九二頁

13 「一切衆生悉皆仏性」は『大乘涅槃經』で説かれたもの。安然是『斟定草木成仏記』の中で『中陰經』の文言を「草木国土悉皆成仏」と言い換えた。(末木文美士『草木成仏の思想 安然と日本人の自然観』サンガ文庫 二〇一五年 六八〜七十頁)

14 「入峰修行十界配当口訣」一八七三年(田川郷土研究会『増補英彦山』葦書房 一九七八年 八一三頁)

15 長野覺「日本の山岳交通路としての修験道の峰入り道に関する研究」『駒澤地理』一九八六年 一三〇頁

16 真言宗の淳祐は「不動尊道場観」(『要尊道場観』)、天台宗の安然是『不動立印儀軌修行次第』の中で不動明王の十九観について述べている。

17 円珍の流れをくむ聖護院(本山修験派)の山伏問答の例。仏陀は「自性輪身」、菩薩は「正法輪身」。衆生の無明を打破するため、仏陀は使者として「教令輪身」という恐るべき姿を示す。(渡辺照宏『不動明王』岩波書店 二〇一三年 三三頁)

18 加来宣幸『福岡の民話』未来社 一九六〇年 一四六〜一四八頁

19 田川郷土研究会『増補英彦山』葦書房 一九七八年 七九三頁

20 佐藤孝『英彦山の史跡と伝説』葦書房 一九八五年 一七頁

21 前掲書(6) 三九頁

22 川島祿郎、陶山源一郎「森林樹種の生育と土壌反応並に石灰との関係について(第二報)」『日本土壤肥料学雑誌』一九四二年 一〇九六頁 *山頂のブナの健全木は二六%に減少している。(猪上信義「福岡県英彦山におけるブナ林の衰退現象と立地の関係」『九州森林研究』二〇〇二年 五七頁)

23 前掲書(10) 三五八〜三五九頁

24 『陰徳太平記七十七』一七一七年(香川正矩『陰徳太平記巻之四』横山書店 一九一九年 三八二頁)

25 長野覺「山岳宗教(修験道) 集落英彦山の構造と経済的基盤」『駒澤地理』一九七九年 二二頁

26 広渡正利『英彦山信仰史の研究』文献出版 一九九四年 一七〇〜一七一頁

27 前掲書(2) 二三七〜二三九頁

28 広渡正利『彦山編年資料近世編』文献出版 二〇〇三年 五三頁

29 当時の杉指場は、四王薬師、上佛来、玉屋、北池尾、豊前坊、古岩平、奥院薬師であった。(前掲書 28 一九〇頁)

30 弓削直樹・田村美帆・渡辺敦史「英彦山周辺スギ古木群の遺伝的關係と九州在来品種起源の解明に向けて」『英彦山修験道における自然信仰と森林文化再興のための鬼杉落枝と千本杉による不動明王像制作』九州大学 二〇二二年 三八〜四一頁

31 『彦山諸神役次第』一四四五年(前掲書(9) 一六三頁)

32 宗賢坊祇暁『鎮西彦山縁起』元龜三年(一五七二)(前掲書 28 九二〜九七頁)

33 染川英輔『曼荼羅図典』大法輪閣 一九九三年

34 筆者は英彦山修験者「知足院」(衆徒方)の子孫であり、彫刻家であることから、『彦山三所権現御正体』《不動明王立像》の復原および『鬼杉不動』制作の依頼があった。俱利伽羅剣と絹索の制作は石上洋明(福岡教育大学)、台座の木材加工は池上二則(大工池上算規)、製材は杉岡世邦(杉岡製材所)が担当している

(ともに・みかこ九州大学芸術工学研究院教授)